

例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、国（1,990,000円）、県（995,000円）の補助金を受け、平成4年4月9日から平成5年3月31日まで実施した。
3. 調査組織
 調査主体者 大井町教育委員会
 教 育 長 小林茂吉
 社会教育課長 吉田和子 文化財保護係長 岩崎保夫
 文化財保護係・発掘調査担当者 坪田幹男・高崎直成・鍋島直久
4. 本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。（順不同）
 執筆は坪田幹男、鍋島直久があたり、それぞれ文末に記した。
 土器復元・拓影：中田藤子、中野和子、丹治つや子、遺物実測：鍋島直久、高橋けい子、石垣ゆき子、斎藤尽志、トレース：小林登喜枝、須藤さち子、図版作成：柚木嘉図子、遺構写真：坪田幹男、鍋島直久、遺物写真：荻原明、鍋島直久、また、本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。
5. 各遺跡の調査から報告書刊行にいたるまで下記の諸氏、機関より御指導、ご協力を賜った。
 浅野晴樹、荒井幹夫、有山隆造、今井堯、内田賢司、加藤秀之、神木繁嘉、駒井和久、桜井信枝、佐藤正志、笹森健一、島田一郎、田代治、谷井彪、中島宏、塚田政子、原口雅樹、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、柳沢健司、和田晋治（敬称略）埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合、亀久保特定土地区画整理組合、大井町立郷土資料館、大井町遺跡調査会。
6. 発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。明記して謝意を表したい。
 〈発掘調査参加者〉（敬称略）
 会沢泉、新井和枝、荒井美奈子、飯塚泰子、石川八重子、井上晴江、内田信治、海老原サナエ、大井美智子、大曾根キク子、遠田つる、笠原英子、片岡ミヤ子、金子君子、神木光治、小林こずい、小山エミ子、斎藤尽志、佐久間ひろ子、佐藤智子、鈴木英子、鈴木エミ子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、高橋明美、戸澤竹二、中嶋末子、仲里しげ子、並木宗次、野岡由紀子、野沢松代、羽柴理恵、林きぬ子、比嘉洋子、細谷清作、三村美代子、森脇やよい、ハッ井幸子、山形幸子、山下一枝、若尾久美子、若林紀美代。
 〈整理作業参加者〉（敬称略）
 石垣ゆき子、斎藤尽志、須藤さち子、柚木嘉図子、高橋けい子、丹治つや子、中田藤子、中野和子
 ※1989年から発掘調査に協力いただいた、遠田つるさんが3月急逝されました。生前のご協力に深く感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

凡 例

1. 本書の図版の縮尺は、住居・土坑1/60、炉1/30、土器実測図1/4、土器拓影1/3とした。
2. 遺構図中の細数字は、床面もしくは確認面からの深さ（cm）を示す。
3. 胎土粒子に関する各項の基準は次のように定めた。
 小礫；2.0mm以上、粗砂；0.2～2mm、細砂0.2mm以下。
4. 土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母粒を含有する縄文土器を表わしている。

I 経緯

○ 調査に至る経緯

埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置する。かつては畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40～50年代にかけて人口で約22,000人、6,000戸が急増した。面積8㎢で現在の人口は39,000人を超えている。昭和60年代以降は、大規模な土地区画整理事業が進められ、町内遺跡の約80%近くがその区域内に位置しているため、土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が町遺跡調査会により通年実施されてきている。町では、国庫補助を受けて「町内東部遺跡群発掘調査事業」(昭和53年～平成元年)「町内遺跡(群)発掘調査事業」(平成2年～)として民間の小規模開発に対処するため、埋蔵文化財の調査を実施してきた。遺跡の調査は、庁内関係各課と連絡調整をして行ってきた。農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また、都市整備課から開発事前協議、建設課から建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会は遺跡地図と照合のうえ現地踏査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響をおよぼすとみなされる工事主体者に連絡し、協議を行った。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったものである。平成4年度の調査は、下記の16箇所であった。民間及び公共事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査についても、国庫補助事業として対応した。

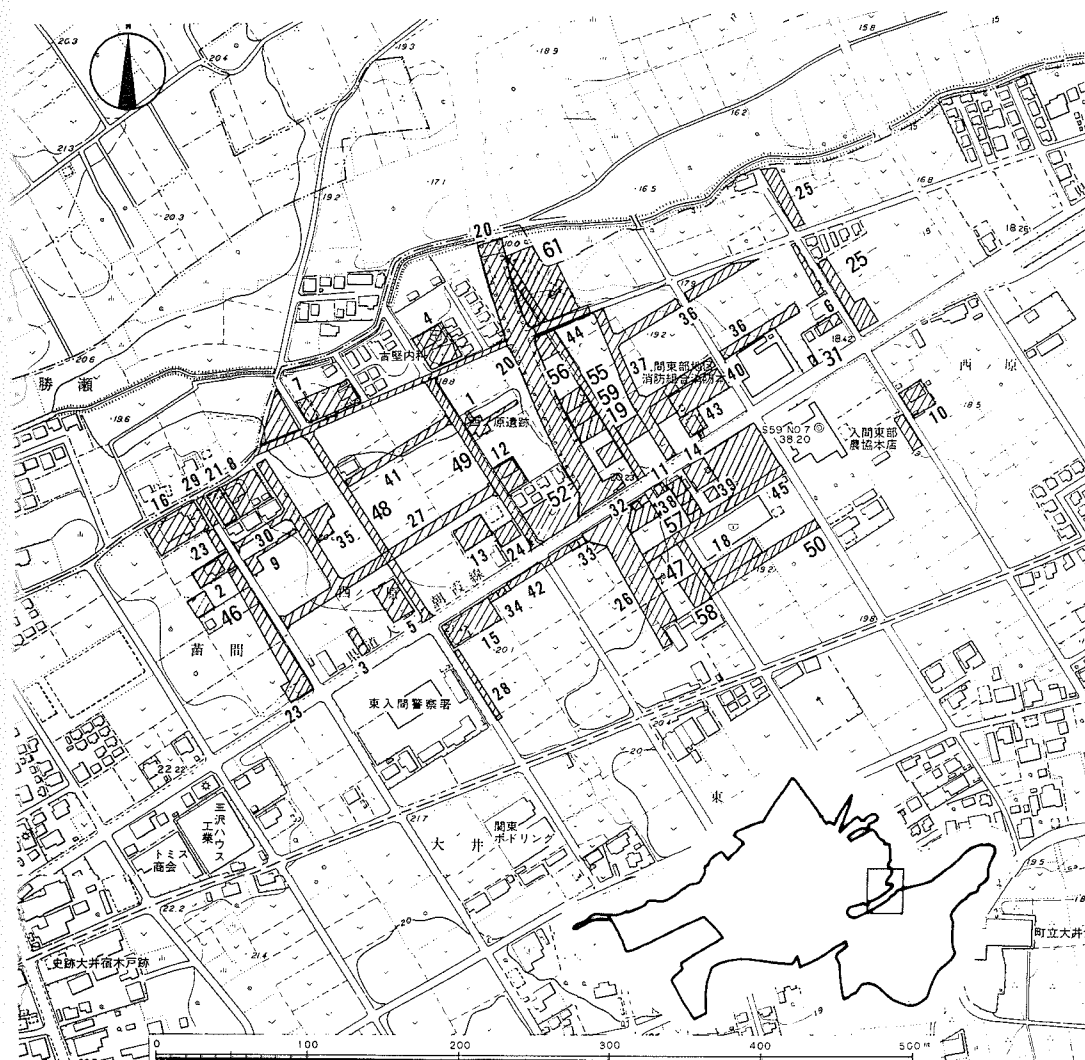
No	遺 跡 地 点 名	所 在 地	開発面積(㎡)	調査原因	調査期間
1	亀居遺跡第33地点	大井町亀久保1011-7	998	個人住宅建設	4/9～4/30
2	本村遺跡第25地点(試掘調査)	〃 大井107	370	倉庫建設	5/21、6/2
3	大井氏館跡遺跡第7地点	〃 大井241-1	157	個人住宅建設	6/3～6/17
4	苗間東久保遺跡第18地点(試掘調査)	〃 苗間字東久保639、640、641、464	906.84	分譲住宅建設	6/2～6/22
5	西ノ原遺跡第56地点	〃 苗間字西ノ原133-2	261.4	〃	6/23～6/26
6	西ノ原遺跡第57地点	〃 苗間字西ノ原143-3、143-4	174	個人住宅建設	7/6～9/1
7	浄禅寺遺跡第7地点(試掘調査)	〃 苗間字東久保573-4	831.15	共同住宅建設	7/4～7/17
9	西ノ原遺跡第58地点	〃 苗間字西ノ原137-2	146	個人住宅建設	9/8
10	中沢前遺跡3地点(試掘調査)	〃 苗間字西ノ原189-3	272	〃	10/1～10/2
11	西ノ原遺跡第59地点	〃 苗間字西ノ原135-1	494.9	〃	10/6～11/12
12	本村遺跡第26地点(試掘調査)	〃 大井348、369、370の一部	575.7	〃	10/4～10/6
13	本村遺跡第27地点(試掘調査)	〃 大井145	1,101	共同住宅建設	10/27
14	中沢前遺跡4地点(試掘調査)	〃 苗間字西ノ原201-2	168	個人住宅建設	11/13、11/20
15	西ノ原遺跡第60地点	〃 苗間字西ノ原136-2	253	〃(曳家)	12/10～12/25
16	中沢前遺跡5地点(試掘調査)	〃 苗間字西ノ原184-1	732	駐車場造成	2/13～2/18

(坪田幹男)

Ⅲ 西ノ原遺跡

Ⅲ-1 遺跡の立地と環境 西ノ原遺跡は、入間川の支流新河岸川に注ぐさかい川の谷頭部から約500m程度下った右岸に位置する。さかい川は前章の亀居遺跡下を東流する福岡江川の南方約1kmを、新河岸川にむけてほぼ平行して流れる武蔵野台地特有の伏流水である。遺跡標高は18～21mで、現谷底との比高差は2～3mを測る程度で起伏の小さい低位台地上に立地する。

本遺跡の発掘調査率は町内遺跡群では突出しており、遺跡面積10haの約40%代が調査されてきている。過去22年間、60箇所にとぶ調査で明らかになった本遺跡の時期は、確認遺構から旧石器時代、縄文時代早期・中期・後期、中世、近世である。特に縄文時代中期にはメガネ状の環状集落が形成され中期全般を通した良好な大規模集落跡として町内屈指の遺跡に挙げられる。今年度は新たに4箇所、面積にして1,328㎡を調査し、早期の炉穴・中期の住居跡他を確認した。



第17図 西ノ原遺跡の地形と調査区 (1/5000)

Ⅲ-5 西ノ原遺跡第59地点

調査の経過と概要

平成4年9月2日、渡辺節夫氏より、西ノ原遺跡内に個人住宅建設による埋蔵文化財包蔵地事前協議書が町教育委員会に提出された。建設予定地は、西ノ原遺跡内の中央部に位置し、東は第44地点、西は第20地点、南は第19地点、北は第55地点とそれぞれ隣接する。隣接する各地点の調査より、本59地点に遺構が延びていることが確認されており、また協議の結果建築の変更などもできないため、記録保存のための調査を国庫補助事業として実施した。

調査は、廃土置場の問題から調査区を東西の半分に分けて行った。調査は西側を1992年10月4日～10月30日、東側部分を1992年10月31日～11月12日まで行い、屋外での調査を終了した。

今回の調査で確認・検出した遺構は、縄文時代早期の炉穴11基、縄文時代中期住居跡3軒、縄文時代の土坑1基、屋外埋甕1基、ピット12基である。検出した住居跡のうち、10号住居跡は1986年に、また16号住居跡は87年の調査で、全体の約70%を確認・調査しており、今回は残りの部分を調査した。

また、隣接する第20地点・第55地点で検出の炉穴について、確実な時期は不明であった。しかし、今回検出した1号炉穴の覆土中から、縄文時代早期後半と思われる遺物が出土している。

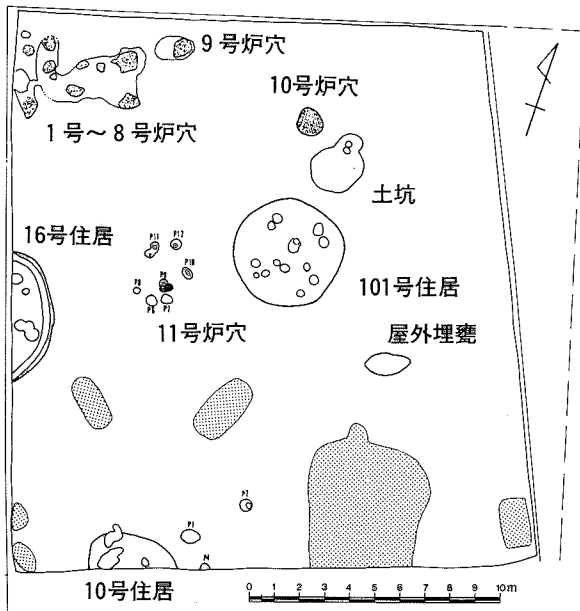
(A) 10号住居 (第37図)

本住居跡は、調査区の南部に位置し、1987年(『東部遺跡群Ⅶ』1987. 大井町教育委員会)の調査で大部分を調査済みである。今回新たに検出したのは、住居跡北側の一部分とピット2

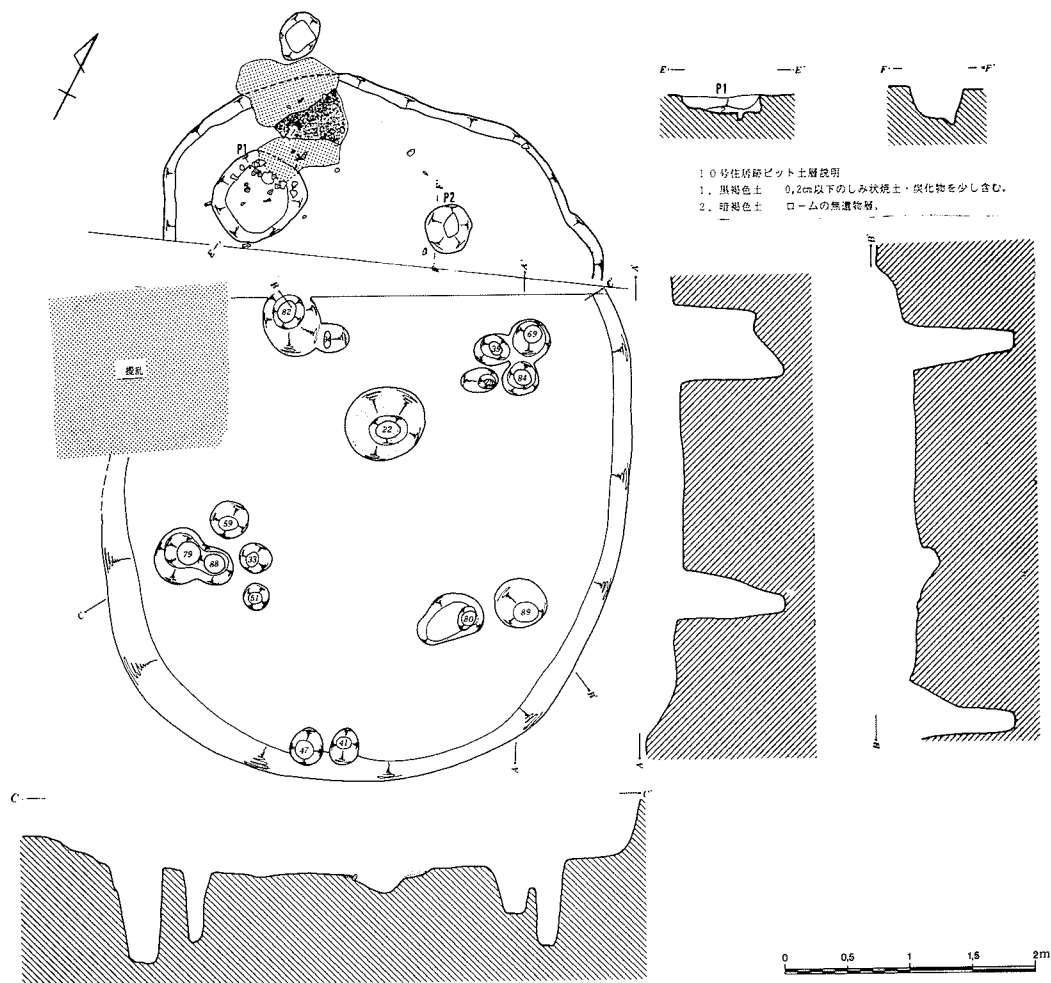
基である。

住居跡の北側の床面及び、壁の一部は攪乱を受けているが、床面の一部に硬化面が確認された。ピット1は平面不整形を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。規模は、66×73cm、深さ27.1cmを測る。ピット2は直径38cmのほぼ円形の平面形を呈し深さは25.8cmを測る。

今回出土した遺物は、10点で全て覆土層出土である。1はキャタピラ紋をもつ勝坂式土器、2は口縁部に横位の浅い沈線と縄文、3は地紋に縄文と縦の隆帯及び沈線、4は縄文と縦の浅い沈線、5・6は土器外面に条痕文を有し繊維は含まない。



第36図 西ノ原遺跡第59地点遺構配置図 (1/300)



第37図 西ノ原遺跡10号住居跡 (1/60) ・出土土器 (1/3)

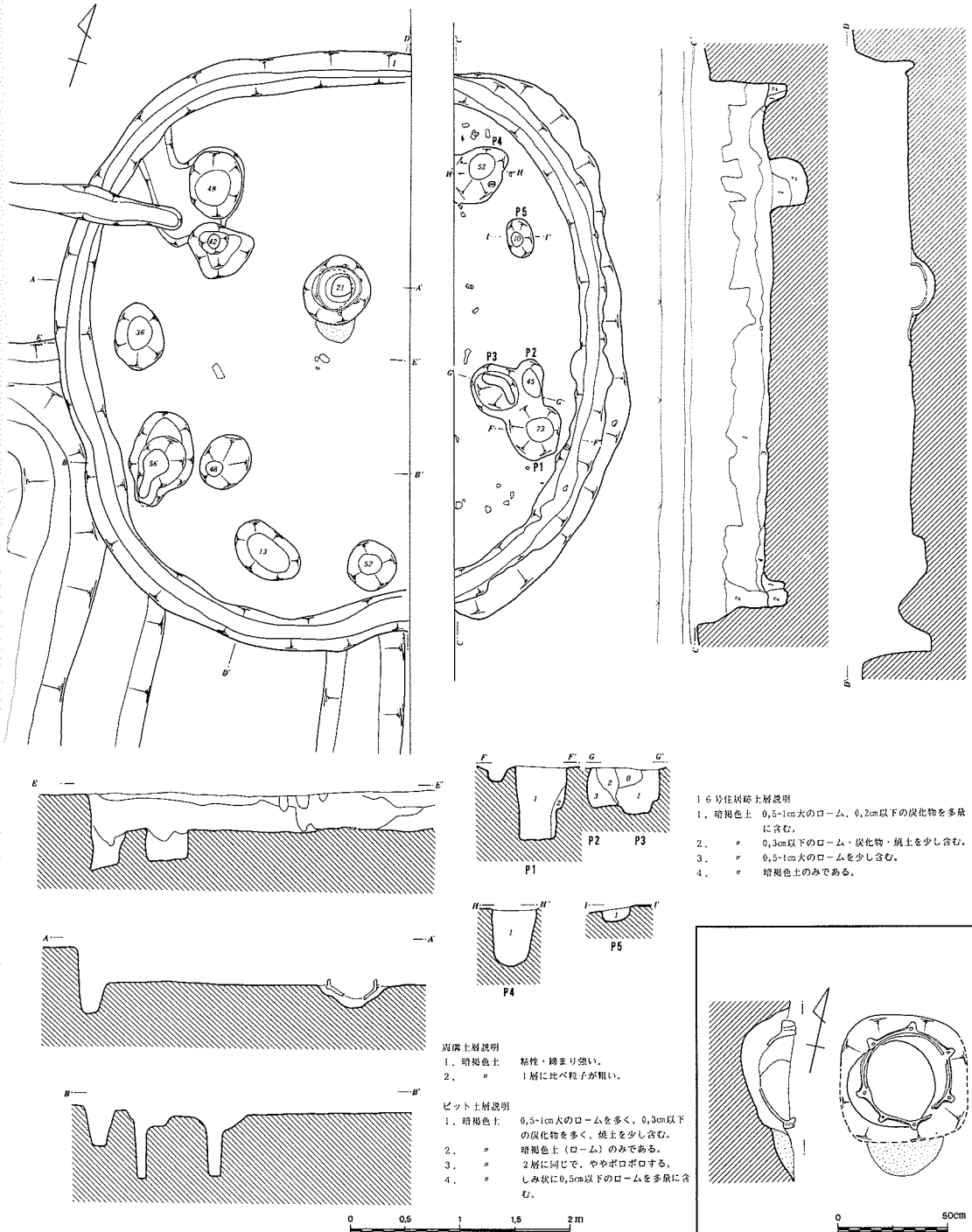
(B) 16号住居 (第38図)

本住居跡は、調査区の西部に位置し、東約7.5mには101号住居跡、南東約7mに10号住居跡が存在する。1987年、第20地点の調査により、住居跡の西側約2/3を調査済みである。

前回の調査と合わせ、住居内ピット11・炉1・周溝1本を検出した。今回は住居跡の東側約1/3を確認・検出した。

平面形は、調査区間で一部未調査の部分があるが、ほぼ円形を呈する。規模は、5.48×5.16m、壁高は確認面より約64cmを測りほぼ垂直ぎみに立ち上がる。

床面 床面はローム層を掘りこんで形成し、ほぼ平坦で壁際より中央部近くが硬く締まっている。壁際に一周する周溝をもち、上幅20~35cm、下幅8~16cm、深さ15.5~25.6cmを測る。



第38図 西ノ原遺跡16号住居跡 (1/60) ・炉 (1/30)

炉 住居跡のはば中央部、北よりに位置する。平面隅丸方形を呈し、加曾利 E I 式期浅鉢の炉体土器をもつ。

柱穴 柱穴は11本検出した。今回検出した、P 1～P 4 は主柱穴の一部と思われる。平面形は、P 1～P 4 は不整の円形を、P 5 は楕円形を呈する。規模は P 1・48×51cm 深さ66cm、P 2・22×(44)cm 深さ45.5cm、P 3・40×46cm 深さ43.6cm、P 4・40×46cm 深さ54.1cm、P 5・14×35.5cm 深さ11cm である。

覆土 覆土は4層で、自然堆積である。



第39図 西ノ原遺跡16号住居跡出土土器 (1/3)

16号住居出土遺物（第39図）

1～30は住居覆土層出土遺物である。1は浅鉢の口縁部、2は横位の隆帯にキャタピラ紋を施し直下に横位の沈線と半截竹管の刺突が並ぶ。3は沈線と押し引き紋、4は横位の隆帯に斜位のキャタピラ紋。5は沈線と斜位のキャタピラ紋。8・9は同一個体、撚り糸紋に沈線を施す。10は口縁部、波状口縁の波状部分。11～18は地紋に縄文、隆帯または沈線を施す。19は地紋に縄文を施し、隆帯には棒状工具の押し圧を施す。20は縦の浅い沈線紋、19・20は櫛状工具による密で浅い沈線。24～26は浅鉢の口縁部。26は内外面赤褐色を呈する。29・30は底部。1～9は勝坂・阿玉台系、10～30は加曽利E系土器である。

(C) 101号住居（第40図）

本住居跡は、調査区の中央部に位置し、南西約7.4mには101号住居跡、西約10.5mに10号住居跡が存在し、北東から南西に延びる数条のゴボウ穴による攪乱をうける。今回の調査で、住居内より炉2、柱穴25基を検出した。周溝は存在しない。

本住居跡は、新旧の炉が検出する点や、柱穴が一部で2重に回ること等から住居の拡張が行われた可能性がある。炉・柱穴ともに北へ約30cm移動している。

平面形はほぼ円形を呈し、規模は4.14×4.2m、壁高は確認面より約24cmを測り約90度の傾斜で立ち上がる。

床面 床面はローム層を掘り込んでおりほぼ平坦である。炉周辺が一部硬化しているが全体的に締まりは弱い。貼床は認められない。

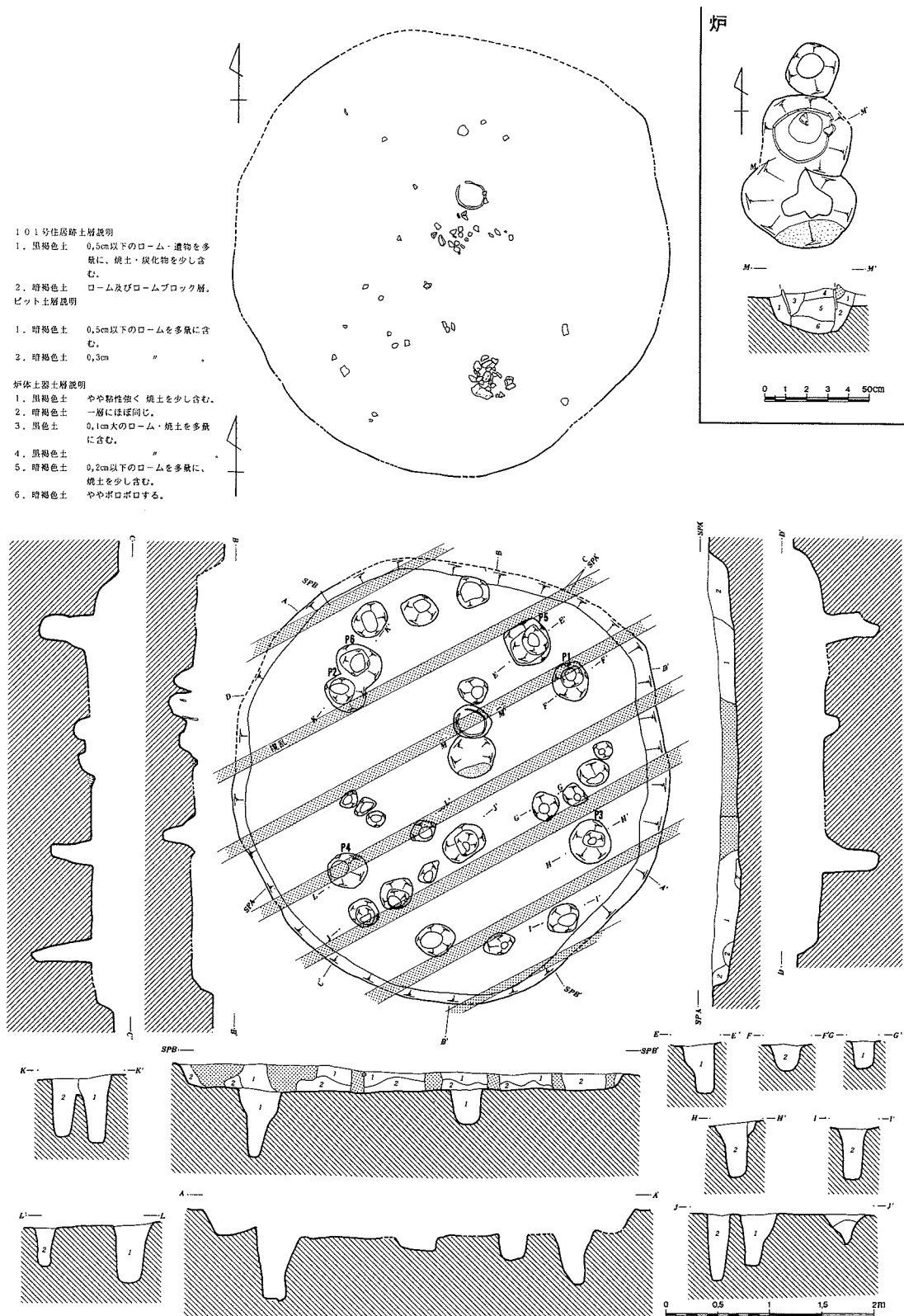
炉 炉は新旧の2か所を検出した。住居内の、中央部やや北よりに南北に並んで位置している。新旧関係については、南が旧く北が新しい。新しい炉は、48×(40)cm・深さ30cmのほぼ楕円形を呈する掘り方中央部に、加曽利I式期深鉢の炉体土器をもつ。旧炉は、50×(40)cm・深さ15cmのほぼ楕円形を呈し、底面は良く焼けて硬化している。

柱穴 柱穴は25本検出した。平面形は不整円形か不整楕円形を呈する。主柱穴は4本、または6本と考えられる（P1～P6）。主柱穴の規模はP1、34×38cm・深さ26cm、P2、40×(33)cm・深さ56cm、P3、40×42cm・深さ51cm、P4、33×38cm・深さ56cm、P5、46×47cm・深さ47cm、P6、45×(34)cm・深さ65cmである。

101号住居出土遺物（第41図）

炉体土器 深鉢形土器の胴部で口縁部、底部を全て人為的に欠損する。地文に撚り糸文を施し、渦巻文をモチーフとする隆帯が胴部を一周する。焼成は良好で、胎土は粗砂を多く含む。

1～41は全て覆土層出土土器である。1は条痕文系土器の口縁部で外面に条痕文を施す。細砂を少し含み、繊維は含まない。2は阿玉台Ib式で器形は、口縁部で丸みをもち胴部との境は「く」の字状を呈する。口唇部および口唇部直下に半截竹管による押し引文を施し、口縁部には、同工具沈線文による区画を作り出す。3は無文のミニチュア土器。4～12は阿玉台・勝坂系土器、13～39は地文が撚り糸文・縄文を中心とする加曽利E系土器である。41は砂岩の石斧片である。



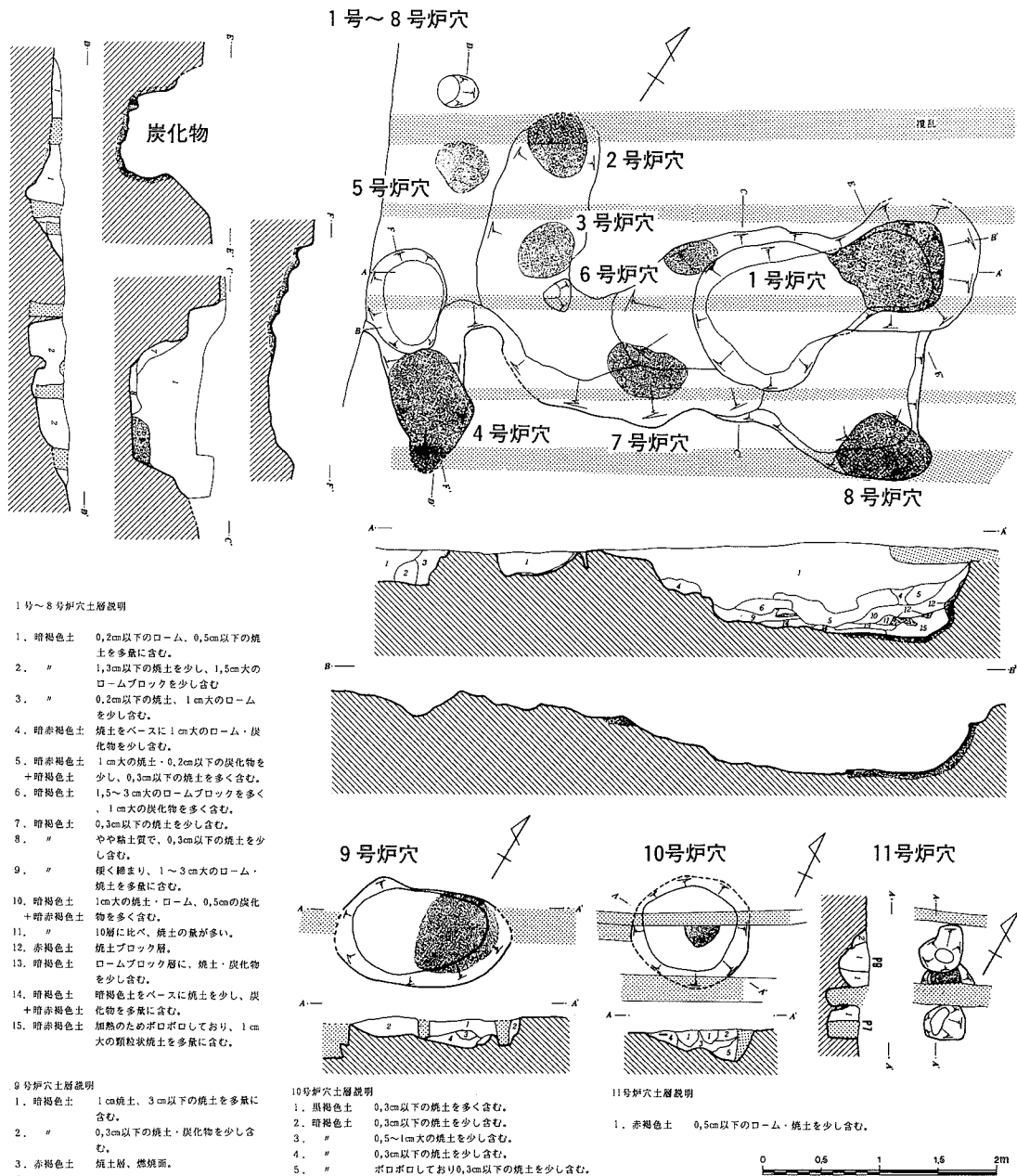
第40図 西ノ原遺跡101号住居跡 (1/60) ・ 炉 (1/30)



第41図 西ノ原遺跡101号住居跡出土土器・石器 (1/3)

D 炉穴 (第42図)

今回検出した炉穴は調査区の北西部に8基が集中し、調査区中央部と中央部やや北よりに1基づつが存在している。本調査区に隣接する第20地点において6基の炉穴を検出しており、本地点の炉穴と一群を形成するものと考えられる。



第42図 西ノ原遺跡第59地点炉穴 (1/60)

1号炉穴

調査区北西部に位置し炉穴6・7・8に隣接あるいは重複する。平面形は不整の楕円形を呈し、断面形は南から北に向かって深くなり、足場部分と炉部を持つ。炉部は遺構の北側部分で、壁はオーバハングしており底面及び壁面も良く焼け、底面直上には炭化物の塊が出土した。遺構南壁は緩く傾斜し、足場部分はほぼ平坦で炉部に向かって僅かに傾斜する。規模は長軸3.2m、短軸82~143cm、深さは足場部分で65~68cm、炉部は68~70cmを測る。覆土は15層で、全体的に焼土を含むが焼土のみの層もみられる。主軸は北東向きである。

2号炉穴

調査区北西部に位置し3・5号炉穴と隣接する。遺構北側部分及び南側を畝が走る。畝による攪乱を受け、2号炉穴と3号炉穴の新旧関係は不明である。全体的に耕作による削平を受け僅かな掘り込みを有する。底面は良く焼けている。平面形はほぼ円形で、規模は直径38cm深さは8.9cmを測る。炉部は48×56cmを測る。

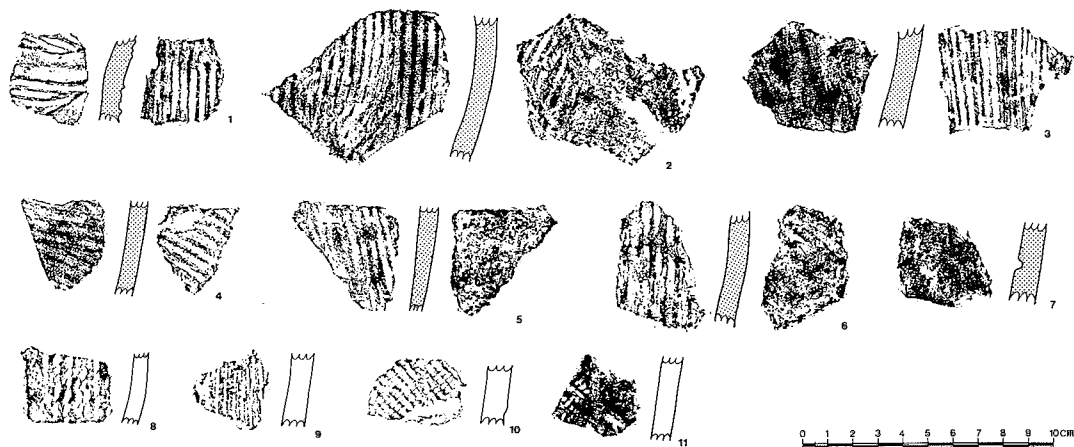
3号炉穴

調査区北西部に位置し2号炉穴と隣接する。耕作による畝のため、新旧関係は不明である。

2号炉穴同様、全体的に耕作による削平を受け、僅かな掘り込みを有する。底面は良く焼けている。平面形はほぼ円形で、規模は直径44~54cm深さは6.6cmを測る。炉部は44×56cmを測る。

4号炉穴

調査区北西部、調査区西壁際に位置する。平面形は不整長楕円形、断面形はやや深い皿状で、足場部分と炉部を持つ。足場部分の平面形は楕円形を呈する。炉部は南東部分で足場部分に向かって凹凸をもちながら傾斜する。規模は、183×74cm深さ38.8cm、炉部は63×90cm、足場部分は72×82cm深さ25.2cmを測る。炉部は良く焼けている。主軸は南東向きである。



第43図 西ノ原遺跡第59地点炉穴出土土器 (1/3)

5号炉穴

調査区北西部に位置し2号炉穴と隣接する。耕作による削平を受け、検出したのは炉部のみである。平面形はほぼ円形で、規模は直径39～44cmを測る。底面は良く焼けている。

6号炉穴

調査区北西部、1号炉穴の壁傾斜部分に位置する。新旧関係については、検出状況から6号炉穴が新しい。検出したのは炉部のみで、平面形は楕円形を呈する。規模は、27×47cmを測る。底面は良く焼けている。

7号炉穴

調査区北西部、1号炉穴の壁傾斜部分に位置する。新旧関係については、検出状況から7号炉穴が新しい。検出したのは炉部のみで、平面形は不整楕円形を呈する。規模は、41×69cmを測る。底面は良く焼けている。

8号炉穴

調査区北西部、1号炉穴の南東約70cmに位置する。新旧関係については、土層の観察から1号炉穴に切られている。遺構南側部分を耕作の畝が走る。平面形は不整形で、浅い掘り込みをもち炉部と足場部分を持つ。炉部は遺構の南側部分で良く焼けているが、一部耕作による攪乱を受ける。規模は長軸1.4m、足場部分75×76～144cm深さ17.1cm、炉部30×66cm。

9号炉穴

調査区北西部、1号炉穴の北西約40cmに位置する。平面形は楕円形、断面形は凹凸のある皿状を呈し、炉部と足場部分を有する。炉部は遺構の東側による。底面は良く焼けている。規模は長軸1.54m、短軸84cm、深さは足場部分で10.4～24cm、炉部は68～70cmを測る。主軸はほぼ北西である。

10号炉穴

調査区中央部北よりに位置し、南東約70cmに土坑、南約2.6mに101号住居が存在する。遺構の中央部及び南側の一部を耕作の畝が走る。平面形はほぼ円形を呈し、掘り込みをもつ。底面は凹凸し、加熱のためかボロボロしており0.3cm以下の焼土がみられる。焼土は遺構の中央部で、覆土中に集中している。規模は直径51cm深さ14～28cm、炉部は直径約18～30cmを測る。

11号炉穴

調査区中央部に位置し、北側をピット9に切られ南側を耕作の畝が走る。平面形は円形を呈すると思われる。規模は16×46cm深さ26cmを測る。炉部は8×26cmを測る。焼土は覆土層に含まれ、底面は焼けていない。

炉穴出土土器（第43図）

1～6は1号炉穴覆土層出土の縄文早期後半の土器胴部片である。焼成は全て良好で、胎土に繊維を含むのは、2・3・4である。1は、外面に細隆起線によって区画された文様を、内面は条痕文を施し、色調は暗赤褐色である。2～4・6は内外面に条痕文を施す。2・4は黒色、3は赤褐色、5は暗褐色、6は明褐色を呈する。5は外面に条痕文を施し内面は無文である。

E 屋外埋甕

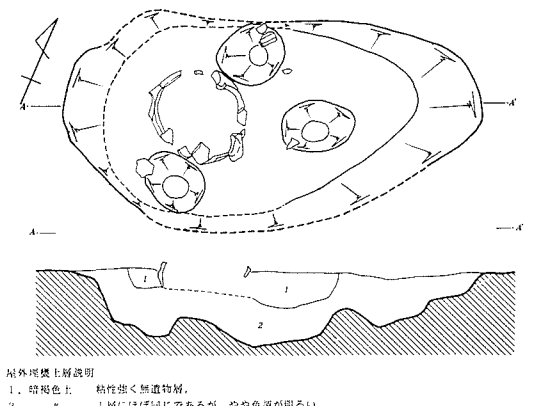
住居跡の埋甕・炉体土器以外で土器が単独に埋設された遺構である。調査区中央部南東より位置し、北西約3mに第101号住居跡が存在する。埋甕は、不整卵形を呈する土坑内に、口縁部を下に伏せる逆位に埋設され、やや東に傾く状態で出土した。

土構の規模は1.68m×86cm、深さは確認面より19～30cmを測る。底面は凹凸しており、小ピット3つが存在する。

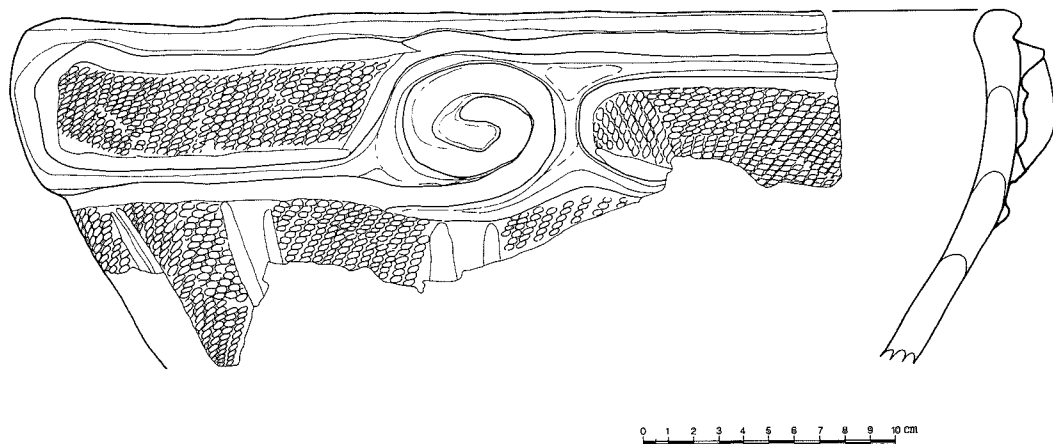
土器は、口縁部がほぼ1周して残存するが頸部から下は全て欠損する。器形は、頸部より線的に緩く開き、口縁部ではやや内湾ぎみに緩く開く。

施紋はLRの縄文原体により、口縁部は横位に、胴部は縦位に施した後、口縁部紋様帯は渦巻紋と楕円区画紋の4単位構成で、渦の方向は左右交互に巻かれている。隆帯は、渦巻部でやや高いほかは全体的にひくい。隆帯の撫でつけおよび、楕円区画紋を作り出す幅広の沈は工具により施されている。胴部は、地文縄文LRを施こし、続いて沈線懸垂文が垂下する。沈線懸垂文は、土器の欠損により6単位が確認されるが、本来は12単位で構成されたと考えられ、沈線間は磨消される。胎土は明褐色を呈し、比較的多く、砂粒・赤褐色粒子を含む。焼成・器面状況は良好である。現存高14cm、口縁推定口径39.8cm、体部器厚1.2cm。

加曾利EⅡ式に比定される深鉢。



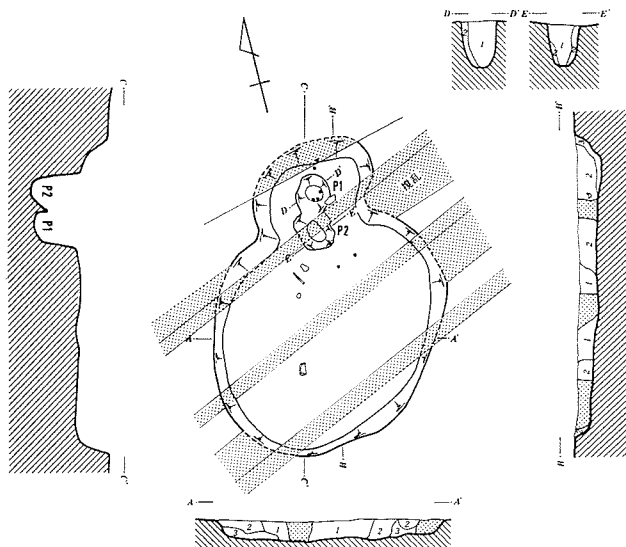
第44図 西ノ原遺跡第59地点屋外埋甕 (1/30)



第45図 西ノ原遺跡第59地点屋外埋設土器 (1/4)

F 土坑・ピット (第46図)

F-1土坑 調査区の中央部、北よりに位置する。平面形は、だるま形を呈する。底面はほぼ平坦であり、底面の北部に2つの小ピットを有する。規模は、 $2.4\text{m} \times 0.9\text{m} \cdot 1.82\text{m}$ 、深さは $10 \sim 26\text{cm}$ を測る。2つの小ピットは接して、メガネ状を呈し、規模は $60\text{cm} \times 24\text{cm} \cdot 26\text{cm}$ 、深さ 72cm を測る。覆土は5層である。1～5層全て暗褐色土で粘性が有り締めりが強い。



土坑1土層説明

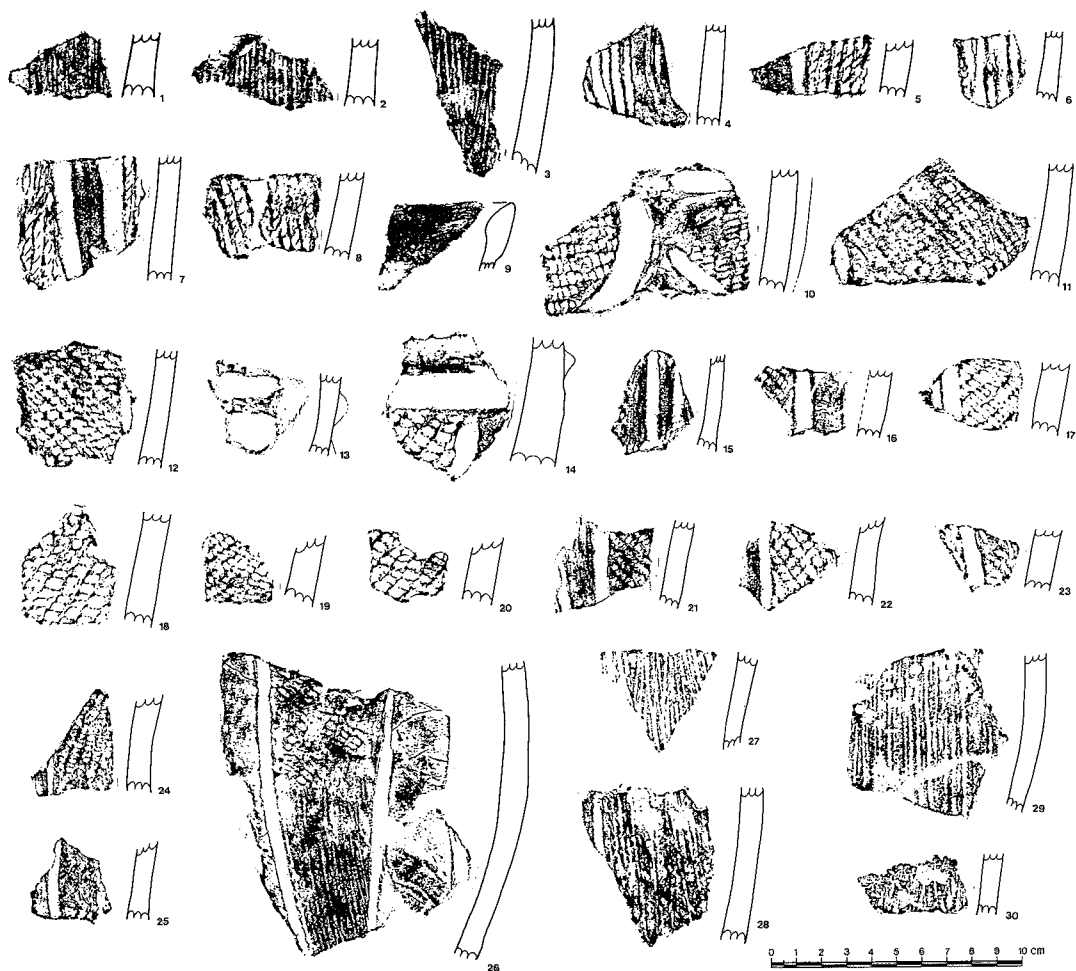
1. 暗褐色土 0.1cm大のロームを多く含む。
 2. " " 少し含む。
 3. " " 無遺物のローム層。

土坑内ピット土層説明

1. 暗褐色土 1.5cm以下のロームを多く含む。
 2. 暗褐色土 しみ状に1.0cm以下のロームを多く含む。

0 0.5 1 1.5 2 m

第46図 西ノ原遺跡第59地点土坑 (1/60)



第47図 西ノ原遺跡第59地点土坑出土土器 (1/3)

土坑出土土器（第47図）

1～30は全て覆土層出土の加曽利系土器である。1～3、27～30は条線を地文、3～8は撚り糸文を地文、9～25は縄文を地文に沈線を施す。26は地文は縄文・条線で懸垂文を施す。

F-2 ピット（第48図）

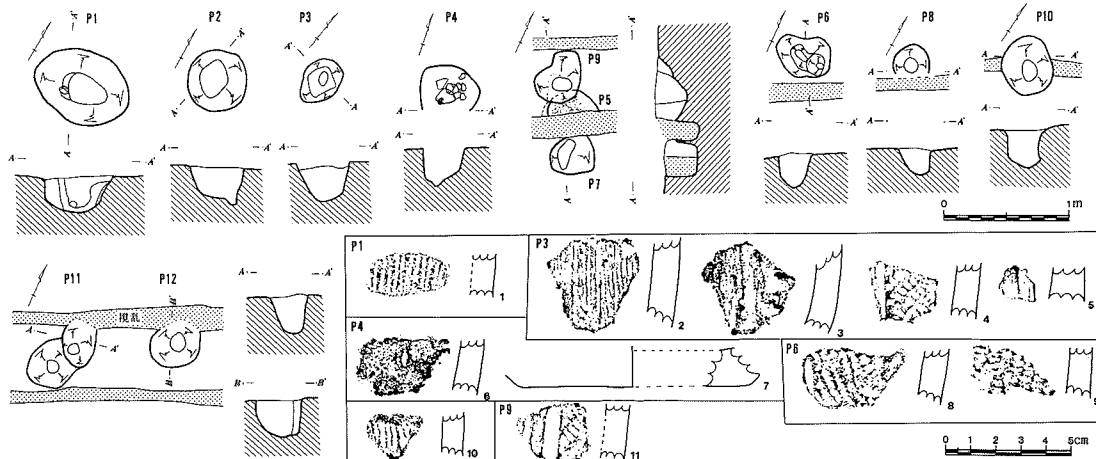
本地点で検出したピットは、12個である。ピットは、調査区の中央部、10号住居跡の西に集中し、また10号住居跡の北側に一部集中して存在する。平面形は、円形、不整円形、不整形を呈する。

ピット出土土器（第48図）

1は撚り糸文、2は条線文、3・6は無文、4・8・11は地文に縄文を施し、その中でも3・11については沈線文も施す。7は底部片。

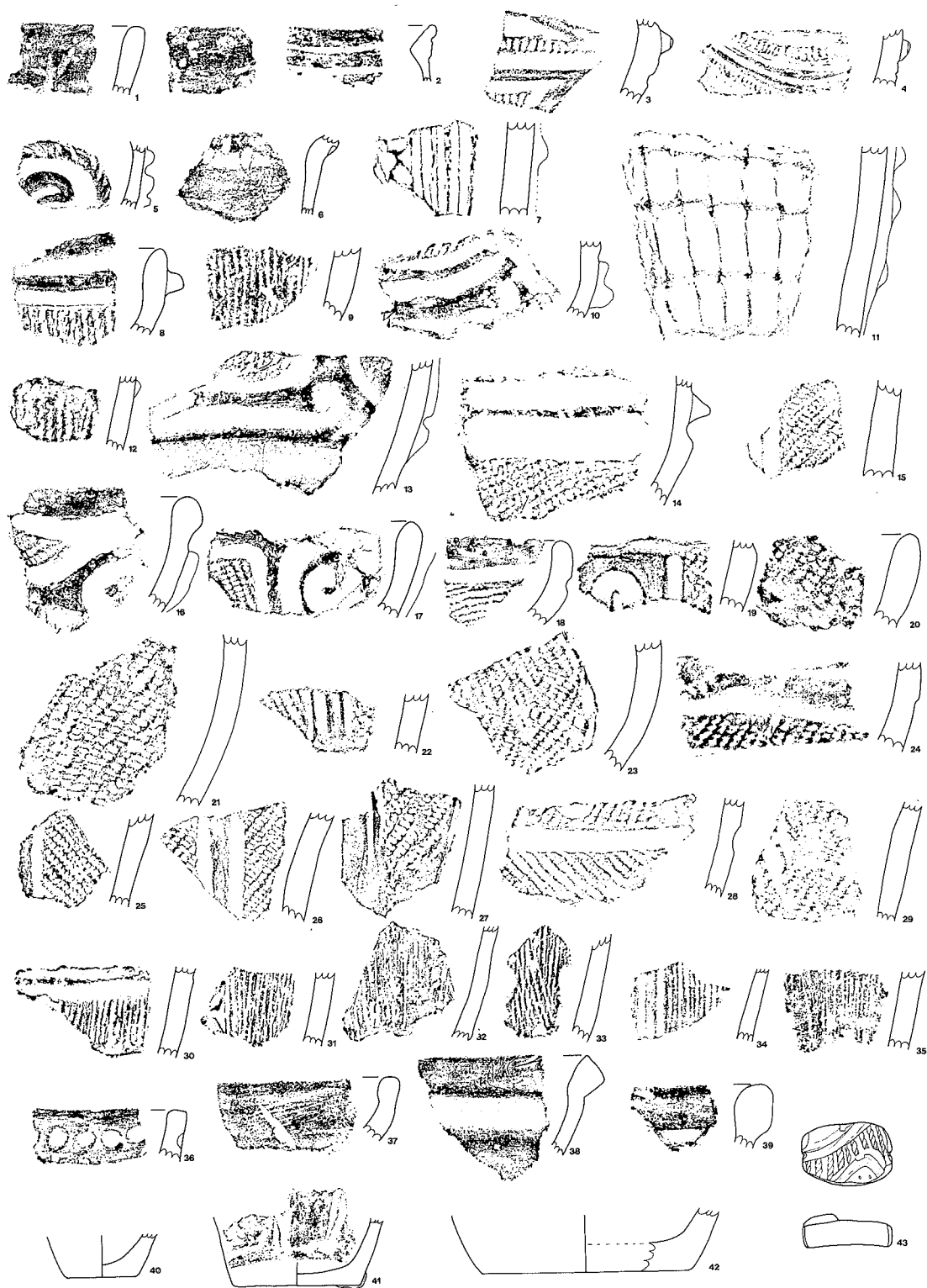
単位cm、カッコは推定

ピットNo	上面径	底面形	深さ	ピットNo	上面径	底面形	深さ
1	58×78	22×36	27	7	(30)×35	9×25	25
2	50	22×31	30	8	(25)×29	11×11	20
3	30×46	24×26	31	9	35×41	10×15	25
4	(38)×49	11×14	32	10	50×47	11×16	30
5	(16)×46	15	26	11	24×(39)	7×7	30
6	36×46	14×30	27	12	39×40	10×15	30



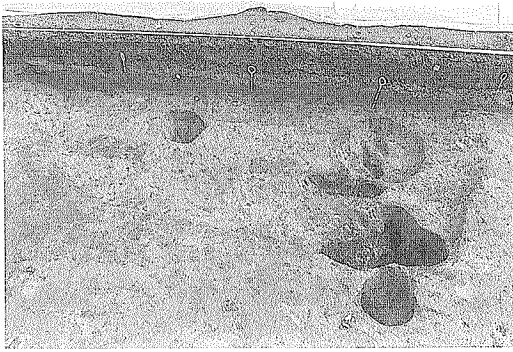
第48図 西ノ原遺跡第59地点ピット（1/60）・出土土器（1/3）

G 遺構外の遺物（第49図） 1～43は表土層、攪乱、包含層出土土器である。1は無文口縁部片、2～4は阿玉台・勝坂系土器。8・9・12・13は地文に撚り糸文を施す。11は大型土器胴部片で、縦横の直交する隆帯により方形の区画を作り出す。14～29は縄文、または地文縄文に沈線文・磨消しを施す。30～35は地文に条線文・沈線文を施す。36～39は浅鉢形土器口縁部片で、36は円形刺突文を施す。40～42は土器底部で、40は小型土器である。43は土錐。土器片を利用し縁部を擦って調整後、両端に刻みを施す。（鍋島直久）

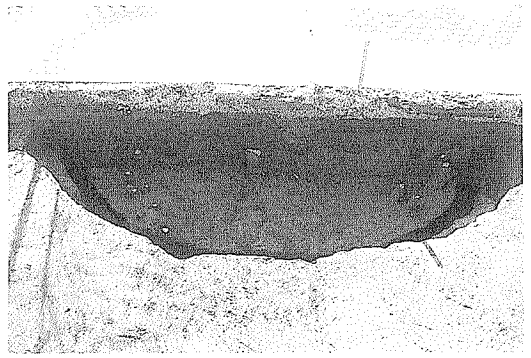


第49図 西ノ原遺跡第59地点遺構外出土遺物 (1/3)

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 cm



10号住居跡（北より）



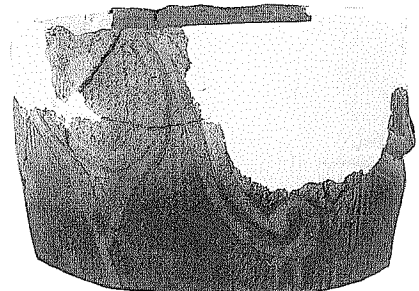
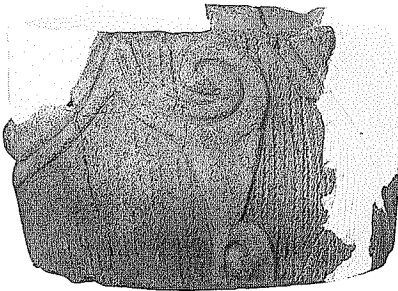
16号住居跡（東より）



101号住居跡炉体土器



101号住居跡炉体土器



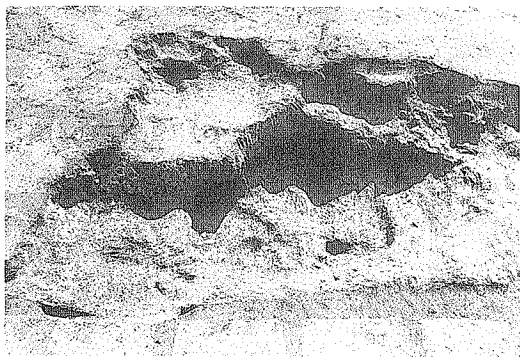
101号住居跡炉体土器



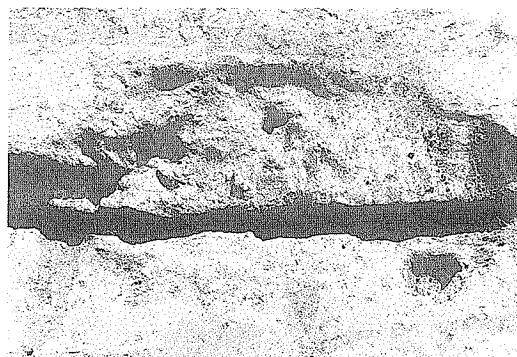
101号住居跡（東より）



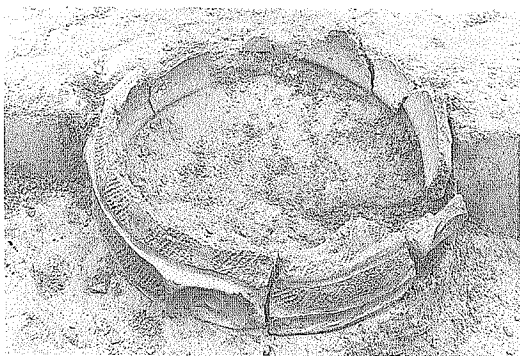
1～9号炉穴全景



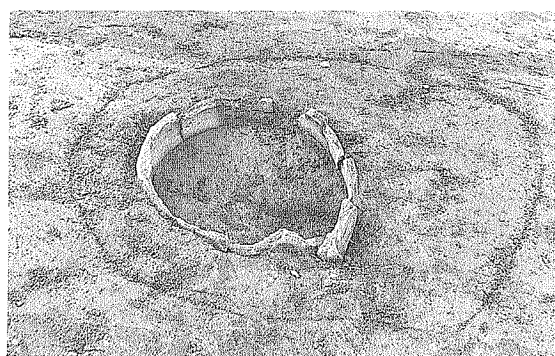
1号炉穴



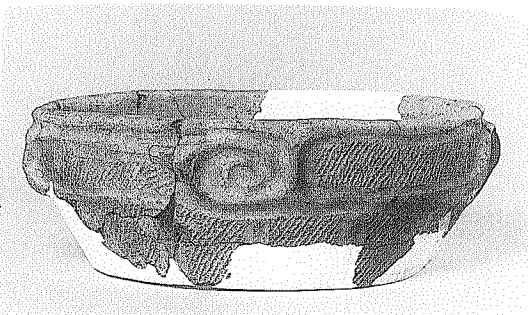
10号炉穴



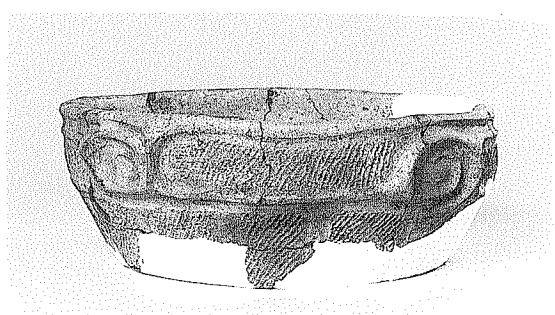
屋外埋甕出土状態



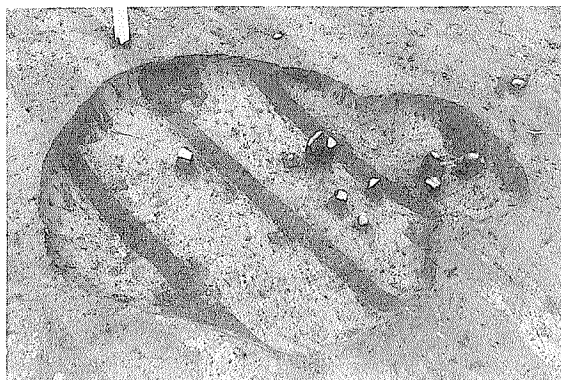
屋外埋甕出土状態



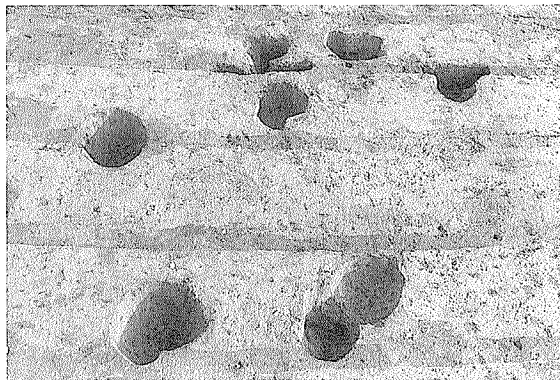
屋外埋甕埋設土器



屋外埋甕埋設土器



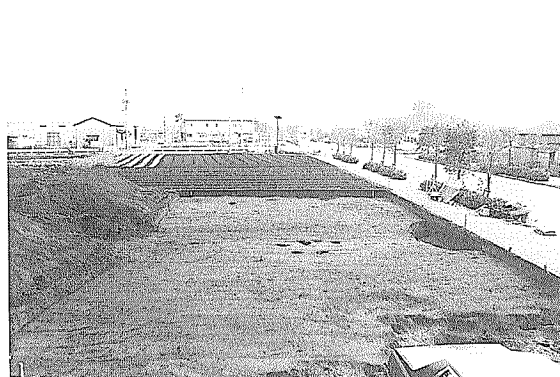
第59地点土坑全景



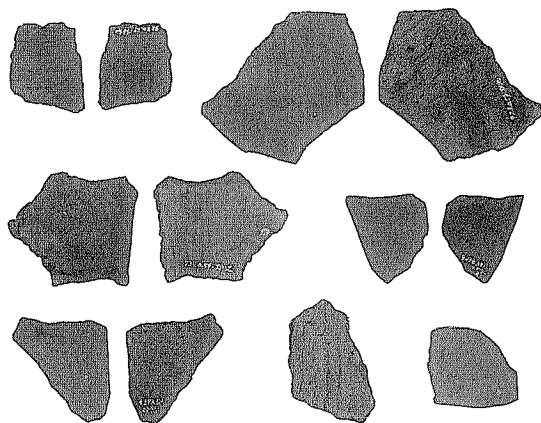
第59地点1～10ピット・11号炉穴



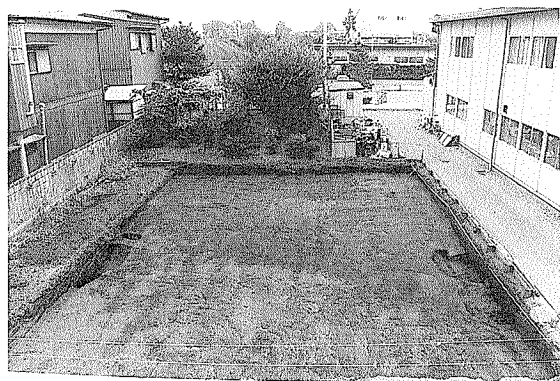
第59地点調査区東側全景



第59地点調査区西側全景



第59地点炉穴出土土器



第58地点調査区全景



第56地点調査風景



第56地点ピット群